

地域が変わる—— 地域活性化の現場



高島

©風と土の交藝プロジェクトチーム ▶ <http://www.kazetotsuchi.musubime.tv/>

地域で「手仕事」を営む人々の暮らしを公開する オープンアトリエ型イベント「風と土の交藝in琵琶湖高島」。

冬の高島ににぎわいを招く「風と土の交藝in琵琶湖高島」。多様なジャンルの工芸作家や農業、漁業の従事者が暮らす高島の特徴を生かし、仕事場や住居をめぐる周遊型のイベントだ。平成25年度滋賀県「美の滋賀」地域づくりモデル事業に採択されたこのイベントは、アートによるまちおこしの事例として注目を集めている。

「手仕事」で暮らす人の ありのままの姿を見せる

「風と土の交藝」という名前には、高島へ移住してきた作家や来場者を「風の人」、高島で生まれ育った作家や地域の住民を「土の人」と呼び、作品や暮らしを知ることで交流を深め、高島の魅力を感じてほしいという思いが込められている。また「交藝」の「藝」の文字は「植物を植える」という意味も持ち、工芸作家だけでなく農業や漁業を営む人々

が出展を行うことを表している。会期中は出展者の工房や住まいを会場として使用し、ありのままの暮らしを公開する。入場券にあたる「風のパスポート」を購入すれば、会場を何カ所でも訪ねられる。ガラス工芸や陶芸、草木染め、アクセサリー、写真、木工などの作品をアトリエで観ることができ、会場によってはその場で購入することも可能だ。農家の会場では炉端で餅を食べながら、冬の作業等について生産者から直接話を聞ける。古民家を再生した家や薪ストーブ

ープを活用している家も多く、高島の自然を生かした暮らしにふれることができる。出展者や作品だけでなく、その仕事や暮らしの現場を目にすることができるのが「風と土の交藝」の醍醐味だ。

4回目となる昨年は11月末から12月上旬に6日間開催し、50組が出展した。来場者数は延べ約6,500人。滋賀県内からの来場者が6割を占めるが、京都や大阪など他府県からの来場者や、東海や首都圏、九州からのリピーターも多い。

高島の現状を打ち破り、 移住者を呼び込む

このイベントを運営するのが、風と土の交藝プロジェクトチームだ。びわ湖高島観光協会、たかしま市民協働交流センター等をはじめとする地元の組織や出展者などの有志が、特定非営利活動法人「結びめ」と共に参画している。

「結びめ」は2009年、地域資源や空き家を活用した移住者支援を目的に設立され、11年に「風と土の交藝」をスタートさせた。代表を務めるのは、高島市で建築会社を営む澤村幸一郎さんだ。「高

島は京阪神へのアクセスが便利で、豊かな自然にも恵まれています。四季の風情を肌で感じることができ、琵琶湖もそばにある。この高島ならではの生活に憧れる移住者は、10年以上前から増え続けてきました。移住者の中には作家も多く、スイスやアメリカなど海外からやってくる方もいますが、さまざまな事情から都市へ戻るケースも少なくありません。そこで私たちは、市内の空き家の実態調査、セルフビルドの講座や農業体験の開催、田舎暮らしを気軽に体験できる施設『山里暮らし交房 風結い』運営等で、移住促進に力を尽くしてきました。

高島に惹かれた移住希望者が増える一方で、高島市の人口減少は顕在化し、空き家や耕作放棄地の増加、共同作業の担い手不足などでコミュニティの維持が難しくなる地域も現れてきた。移住希望者をそのまま受け入れれば人口は増える。しかし移住者が地域と共生できなければ、高島が抱える問題の根本的な解決にはならない。この現状を打破するために、移住した作家をはじめ高島で暮らす人々が、ありのままの姿を見せる場として生まれたのが「風と土の交藝」だ。

イベントの開催を通して 地域への思いがひとつに

「初回は11年1月に開催しましたが、雪の影響で会場間の移動が難しかったため、2回目からは12月に変更しました。集客のことを考えるといいシーズンだとはいえませんが、高島での生活を希望する方に高島の冬を体感し、いろりや薪ストーブにみんなで集まるあたたかさを知ってほしいという思いから、あえて冬期開催にこだわっています」と語るのは、イベントの立ち上げから企



漁業を営む人が公開した舟屋

画運営にあたってきた事務局の西川唱子さん。当初は地域住民の理解を得ることに大きな労力を要したという。しかし第1回目を実現してからは徐々にイベントへの関心が高まり、自治体からの助力や有志が集まるようになった。

作家の中には、積極的に企画会議に参加する人も多い。農業や漁業を営む人々の出展に関しても、議論に加わった作家が発案したのだという。「出展する作家の多くは、自分たちを『芸術家』のように特別な存在だとは考えていません。制作のかたわら地区長を務める方もいますし、農業や漁業を営む方に対して、同じ「手仕事」に取り組む者として互いを知りたいと考えています。イベントを始めてからは出展者の交流も深まり、布製品の作家のアトリエで農家の方が餅つきを実演するなど、新しいコラボレーションも生まれました」と西川さん。このように、地域で力を合わせて高島の魅力を発信したいという思いが集まり、風と土の交藝プロジェクトチームが結成された。

さまざまな力を結集して実現した 「TAKASHIMA 六郷交座」

高島への思いが地域へと広がった成果が、特別企画「TAKASHIMA



高島の伝統工芸品・雲平筆の作家(右)の工房

六郷交座」だ。「風と土の交藝」の会期中、高島を愛する人々が毎日異なるイベントを企画し、会場周辺をにぎわせた。高島市商工会青年部とともに企画した「高島びれっじ」でのパルイベントや、古民家再生に取り組む移住者や若手農家による座談会、森林資源を活用したまちづくりで注目を集める岡山県西粟倉村の企画会社によるセミナー等を開催。最終日には出展者や来訪者、スタッフが一堂に会して楽しめるパーティーを若手のサポートスタッフが企画した。

「サポートスタッフとは公募によるボランティアのこと。最近では、高島への移住を考えている方や地元の若い世代の応募も増えました。スタッフ同士の交流を通して、異なる世代間のつながりができることも期待しています」と西川さん。「『風と土の交藝』開催から、地域の意識も変わってきました。一丸となって全力で取り組めるポテンシャルの高さに気づき、高島にあるものを大切にしたいという意識が芽生えています。より多くの方に高島を訪れていただけるよう地域とのつながりをより強いものにして、高島の魅力や地域の空き家の価値を全国に発信し続けていきたいですね」と、澤村さんは抱負を語る。



工房に展示された作品。作品の制作だけでなく、展示にも作家が力を注いでいる